

Mrs. Gaskell, “The Squire’s Story” の構造分析

大 野 龍 浩

- I. 序
- II. 場面設定の解明
- III. 登場人物の分析
- IV. 主筋と副筋
- V. 結

I. 序

Elizabeth Gaskellの短編小説 “The Squire’s Story” (1853) は、Charles Dickensの依頼を受けて、彼の主宰する週刊誌*Household Words*のクリスマス特別号（1853年12月19日発行）に掲載された（Bonaparte 51; Chadwick 38, 195; Easson 260; Sanders 60; Sharps 187; Storey 62, 140, 142, 221; Ward xxxii）。

“I won’t give any outline. Because anything that you like to write in the way of story-telling . . . will please me. All I say, is, it is supposed to be told by somebody at the Xmas Fireside. . . . And it need not be about Xmas and winter, and it need not have a moral” (Dickens’s letter to Mrs. Gaskell on 19 September 1853 (Storey 151)). とのDickensの要請に沿って書かれたせいか、この作品は、moralらしいmoralを含んでおらず、強いてそれを読み込みもうとすると、曲解の弊に陥る恐れがある。

従って本稿では、上述のDickensの要請と、「クリスマスの夜、暖炉を囲んでぞっとするような話をして聞き手を怖がらせることは、一種の楽しみであった」(Bacigalupo 164; Chadwick 195; Easson 219) という当時の習慣を考慮して、

《主題 (moral)》を探ることは敢えてせず、「作者は、読者の恐怖心を煽るために、いかなる工夫を施しているか」という観点から、《構造》面の解析をめざすことで、筆者なりの作品論を提供することにしたい。

まず、「Ⅱ. 場面設定の解明」で、筋の流れに基づいて場面を特定し、作者がsuspenseを構築していく過程を吟味する。

次に、「Ⅲ. 登場人物の分析」では、主な登場人物がsuspense構築のために果たしている役割について考える。

「Ⅳ. 主筋と副筋」では、作品中最も言及が多くて筋の展開上の基盤となっている「狩り」と「Squire Hearnの不幸」の描写を、「各々がsuspense構築にどのような役割を果たしているか」という観点から考察しながら、副筋の存在を指摘する。

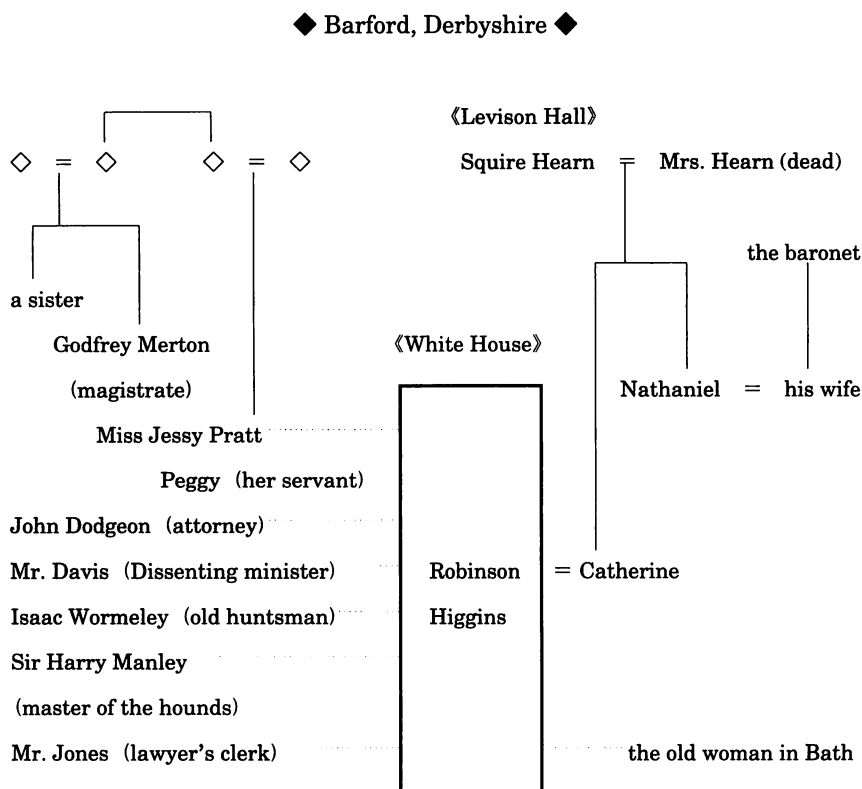
最後に、「Ⅴ. 結」で、以上の分析を基に、「読者の恐怖心を煽るために作者が施した工夫」を整理し、作者が意図した作品構造を明らかにする。

Ⅱ. 場面設定の解明

Dickensの要請通りの作品をMrs. Gaskellが書いたとすれば、彼女は「読者を怖がらせること」を執筆の目的にしたはずであり、その目的を最も効果的に果たすための工夫をしているはずである（残念ながら、序章で引用したDickensの手紙に前後するDickens宛のMrs. Gaskellの手紙は、彼女の書簡集には見当たらない。しかしながら、Mrs. Gaskellの寄稿に謝意を伝えるDickensの手紙は残っており（“I want to thank you, cordially, simply, and affectionately, for your valuable aid to Household Words. . . . I have read what you have written there with true interest and emotion; but I have felt the spirit which induced you to write it, even more” (To Mrs. Gaskell on 2 January 1854 (Storey 235))、その内容から、“The Squire's Story”が彼の要請に適ったものであったことが推察できる。また、「恐怖物語」の寄稿を依頼するDickensの手紙からも、この作品が“ghostly”な性質を帯びたものであることが推論できる (To Mrs. Gaskell on 13 April 1853 (Storey 62))。この前提に基づいて、筋の流れを綿密にたどってみると、作者が読者の恐怖心を煽るために、

計画的にsuspenseを構築していることが分かる (ついでながら、“The Squire’s Story” とは、“[Every contributor’s tale] is supposed to be told by somebody at the Xmas Fireside” (Storey 151).というDickensの編集方針に従ってつけられたもので、「地主が語る物語」の意味 (Bacigalupo 164-65; Sharps 188)。主人公Robinson Higginsが地主を装っていたことを捕らえて、「地主Higginsの物語」 (Easson 216) とするのは誤解であろう)。

図 1 : Main Characters in “The Squire’s Story”



結論を先に述べることになるが、筋の展開に応じて場面を特定してみると、作者は、①場面を頻繁に切り替え、②「起承転結」構造を導入する、という二つの工夫を凝らしていることが明らかになる（「表1：A Chronology of "The Squire's Story"」は、その結果を整理したものであり、本章の総括であると同時に、次章以降の論の展開にもかかわるものだから、これから後、随時参照していただければ幸いである。但し、作品中の日付には杜撰なところがあり、第一場面の記述どおりに1769年を起点として筋を追っていくと、Higginsの処刑が第十場面にある1775年とはならないことを申し添えておく。尚、「図1：Main Characters in "The Squire's Story"」も、折に触れてご覧いただきたい）。以下、各場面の内容を簡潔に説明することによって、上記の結論を得た根拠を述べることにする。

1. 第一場面 (532頁第1段落～534頁第2段落; 約2.5頁)

この場面の内容は、“In the year 1769, the little town of Barford was thrown into a state of great excitement by the intelligence that a gentleman (and “quite the gentleman,” said the landlord [Saunders] of the “George Inn”), had been looking at Mr. Clavering’s old house.”¹ という冒頭の一文に要約されている。

“White House” という貸家を下見に来たRobinson Higginsは、“The gentleman was tall, well-dressed, handsome; but there was a sinister cold look in his quick-glancing, light blue eye, which a keen observer might not have liked” (533). と描写され、しかも、その直後に “There were no keen observers among the boys and ill-conditioned gaping girls [who surrounded him]” (533). という記述が用意されている。前文で喚起された、“the keenest observer” であるはずの読者のHigginsの人となりに関する好奇心は、後文の記述によって倍増する。

続けて、「自分に群がる子供たちを、あつく熱した硬貨を握らせて懲らしめる」という彼の残忍性を紹介した後、作者は “[T]he uneasy wonder as to who this Mr. Robinson Higgins could be, filled the clerk’s [Mr. Jone’s] mind

表 1 : A Chronology of "The Squire's Story"

場面	時 の 経 過		主 な 記 述 内 容	該当頁	該当頁数	
	推定年	判断の根拠				
起	一	1769	(532)	(イ)Barford郊外にあるWhite Houseの紹介 (ロ)Robinson Higgins という紳士が、その館を下見に来た時の様子	532(1)-34(2)	2.5
				(ハ)Higgins は、Barfordの地主たちとの狩猟で活躍し、Sir Harry Manleyの信頼を得る	534(3)-36(5)	
	二	1770	一年後 (536)	(イ)Higgins は Barford 社会に溶け込み、Squire Hearn の娘 Catherine と恋をする	536(6)-38(1)	2.0
	三			(イ)Higgins と Catherine の駆け落ち (ロ)Squire Hearn の嘆きと Nathaniel の詰問 (ハ)Higgins 夫妻の評判があがる	538(2)-39(2)	1.5
	四			(イ)Miss Jessie Pratt 登場 (ロ)Higgins が地代の集金から帰った後数日間は決まって痛飲する、という噂	539(3)-40(3)	6.0
承	五	1774	(543)			1.0
	六	1774	one day (540)	(イ)狩りの最中、狐を追って新邸を訪ねてきた地主たちを、Barfordの弁護士 John Dudgeon はもてなす。その際、Higgins に金庫の隠し場所を教える。	540(4)-43(2)	3.0
			二週間後 (543)	(イ)Mr. Dudgeon の金庫が盗まれる		
転	七	1776	盗難事件から二年後、Higginsの結婚から七年後の火曜日 (543)	(イ)George Inn にて、Higgins が Mr. Davis に Bath で老婆が殺された話をする	543(3)-47(1)	3.5
	八		水曜日 (547)	(イ)Mr. Davis が Miss Pratt に昨夜 Higgins から聞いた殺人事件の話をする	547(2)-47(10)	
	九		数日後 (547)	(イ)Miss Pratt と、彼女のいとこで magistrate の Godfrey Merton との会話を通して、殺人事件の新犯人が浮かび上がる	547(11)-49(2)	
結	十	1776	(543)	(イ)事件の真相	549(3)-50(2)	1.0
		[1775?]	(549)	(ロ)Higgins が Derby で処刑される		
				(イ)その後の Catherine と Squire Hearn		
		1853		(イ)つい先日、Higgins 夫妻が住んでいた White House を見てきた、と語り手が語る		

※ 頁数はGaskell, Elizabeth. "The Squire's Story." *The Works of Mrs. Gaskell*. 1906. Vol. 2. New York: AMS Press, 1972. 532-50.による。尚、「該当頁」欄の引照頁後の丸括弧内の数字は、段落を表す。即ち、頁 (段落)。

long after Mr. Higgins, Mr. Higgins's servants, and Mr. Higgins's stud had taken possession of the White House" (534). という文を挿入する。このMr. Jonesの "uneasy wonder" は、読者の "wonder" そのものである。

こうして、「Higginsとは一体どういう人物なのか」という読者の不安を盛り上げてから (See Bacigalupo 166)、作者は場面を変える。

2. 第二場面 (534頁第3段落～536頁第5段落; 約2.0頁)

次の場面は、「White House」の借家人となったHigginsが³、Barfordの地主たちとの狩猟で活躍し、狩猟仲間のリーダーであるSir Harry Manleyの愛顧を得るまでを描いている。

このSir Harryという人物は、人間の価値を「その人の騎乗姿が美しいか否か」で決めることを信条とする男なのだが、この設定は、作品の構成上、次の二つの点で重要である。第一に、このおかげで、「Sir Harryの信頼を得たからと言って、Higginsの人間性が保証されたことには必ずしもならない」ことになり、Higginsの正体を依然として謎のままにしておくことが出来る点。第二に、この設定は、第三場面、第四場面、第十場面と続く「Squire Hearnの不幸」を中心とする副筋（これについては、「Ⅳ. 主筋と副筋」で詳述する）の起点となっている点（第三場面で、Sir HarryのHiggins評を鵜呑みにすることが、Squire Hearnの苦悩のきっかけとなる）。

ここで作者は、suspenseの構築を進める一方、単なる「恐怖物語」で終わらせないための工夫を施した訳である。

3. 第三場面 (536頁第6段落～538頁第1段落; 約1.5頁)

ここから一年後の描写になるので、前場面と区別する。

「愛する娘Catherineが³Barfordの狩猟仲間の人気者となったHigginsと親密になっていくのを心配して、Squire Hearnが³Sir HarryにHigginsの人となり確かめる」というのが、この場面の主たる内容である。Sir HarryにHigginsの人柄について太鼓判を押された後のSquire Hearnを、作者は "Squire Hearn never thought of asking the grounds for his old friend's opinion of

Mr. Higgins; it had been given with too much earnestness for any doubts to cross the old man's mind as to the possibility of its not being well founded" (537). と記述している。

こうしてHigginsの正体についての謎は更に深まる。同時に、第十場面での「Squire Hearnの後悔」に至る伏線が張られる。

4. 第四場面 (538頁第2段落～539頁第2段落; 約1.5頁)

前場面からしばらく時間が経ったある日、CatherineがHigginsと駆け落ちしたことが発覚する。Higginsがそのような挙動に出たのは、Bacigalupoがいみじくも指摘しているように、「自分について正式に調査されては不都合だから」(“[When] Higgins and Catherine Hearn elope—apparently without reason since their match is favored by Squire Hearn—the reader's unconfirmed suspicion is that Higgins suggested the elopement to circumvent a formal investigation into his background” (163).) であろうから、彼の人となりに関する読者の疑惑はいや増すことになる。

続いて、Squire Hearnの嘆き、Nathanielによる父親の詰問、Squire Hearnの弁解、Hearn家の家族関係が気まづくなったこと、Higgins夫妻がBarfordで人気を博していること、などが語られ、「Squire Hearnの苦悩」に描写の中心が移る。

この場面も、第三場面と同様、suspenseを高めながら、登場人物の人間模様を描いている。

5. 第五場面 (539頁第3段落～540頁第3段落; 約1.0頁)

この場面には、第九場面でHigginsが老婆殺人の犯人であることを突きとめることになる老女Miss Jessie Prattが登場する。“Miss Pratt . . . was the thorn in the popular Mr. Higgins's side” (540). という記述には、彼女が、これからの筋の展開上特異な地位を占める可能性がはめかされている。

①「普段は人並み以上に節制しているHigginsが、地代を集金して戻ってきた後数日間に限って痛飲する」という描写、しかも、②その理由を説明した

"That unusual exertion [of visiting his estates in the South to collect his rents] and fatigue . . . *seemed* to require some strange excess to compensate for it" (540; emphasis added). という文に "seemed" を使って、理由を明言するのを避けたこと、更に③ "[R]umours went through the town that he shut himself up, and drank enormously for some days after his return. But no one was admitted to these orgies" (540). と記述して、痛飲の真相を曖昧にしたこと—最終段落のこのような工夫によって、読者は否応なく留守中の Higgins の行動に疑義を抱かざるを得なくなる。

6. 第六場面 (540頁第4段落～543頁第2段落; 約3.0頁)

ここは、狐を追って新邸を訪ねてきた地主たちを、"the attorney of Barford, and the agent for all the county families about" (541) である Mr. John Dudgeon が、もてなす場面である。仕事柄、経済状態をはじめとする地主たちの家庭の事情を熟知していながらも、社会的身分は地主の下であった "attorney" (弁護士) の微妙な立場を描いている (Duthie 47-48)。

「suspense構築」の観点から注目すべきは、彼が Higgins に金庫の隠し場所を教え、それが二週間後に何者かによって盗まれた、ということである。John Dudgeon という人物は、後述の「表2: "The Squire's Story" における主な登場人物の場面別言及回数」「表3: "The Squire's Story" における主な登場人物の場面別頁当たり言及頻度」および「図2: "The Squire's Story" における主要人物の場面別頁当たり言及頻度グラフ」などから分かるように、この場面以外には登場しない。この、いわば《Dudgeon Episode》とでも言うべきものを挿入した作者の意図は、「Higgins の正体を明らかにし始める『転』部段階へ進む前に、彼の正体をほのめかす」ことにある。

地主たちを新邸に迎えた時の Mr. Dudgeon の心境を、作者は "He bore without wincing the entrance of the dirty boots into his exquisitely clean rooms; he only felt grateful for the care with which Mr. Higgins strode about, laboriously and noiselessly moving on the tip of his toes, as he reconnoitered the rooms with a curious eye" (542). と記している。ここで作者は、

「Higginsは、他の地主と違って、思いやりのある人物である」という印象を読者に与えた直後に、“[H]e reconnoitered the rooms with a curious eye.” という文を添え (①)、また、Mr. Dudgeonに案内されて一階の部屋を見て回る Higginsについて、“[T]hey carefully inspected all the ground-floor rooms” (542). と書いている (②)。そして、“reconnoitered” とか “inspected” などという動詞を使って、Higginsが部屋の間取りを頭に入れていることを強調した後、「貴重品の置き場は事務所でなく新邸であると、Mr. DudgeonがHigginsに教えた」ことを、わざわざ括弧付きで述べている (“[A]lthough his office was in Barford, he kept (*as he informed Mr. Higgins*) what was the most valuable here” (542; emphasis added).) (③)。しかも、隠し部屋の窓を明ける仕掛けを知っているのは、Mr. Dudgeon自身と “a few of his most intimate friends, to whom he had proudly shown it” (543) だけである (④)。こうして、作者は、窃盗犯がHigginsであることを、四度にわたって示唆しているのである。

一方、上の段落の冒頭で触れた「Higginsの思いやり」や、「Higginsは窃盗の容疑者を取り調べた裁判官の一人であった」という設定、あるいは「事件後、HigginsがMr. Dudgeonをからかった」という記述の挿入などは、「Higginsは盗難事件とは無関係」という印象を読者に与えるための工夫である。第六場面の段階でHigginsの正体を明らかにし過ぎては、不都合だからである。

作者がこうして読者の心理を操作しているのが、お分かりいただけるだろうか。

7. 第七場面 (543頁第3段落～547頁第1段落; 約3.5頁)

「Higginsという紳士がBarfordにやって来た」ことを述べた第一場面を物語の導入部「起」、「彼とBarfordの人々との交わり」を描いた第二～第六場面を「承」とすれば、「老婆殺人事件」という、これまでの筋の流れとは全く違った話題について述べる第七～九場面は、「転」部ということになるだろう。

この場面にも、「Higginsの正体」に関するsuspenseを高めるための工夫と同時に、「人間ドラマ」を描き込む意図が隠されている。

前者に関しては、①Higginsの語り口が、まるで自分が殺人現場にいたかのように、生々しいこと（だから、聞き手のMr. Davisが、怖じ気づいて、“I hardly like to leave this warm, light room and go out into the darkness after hearing it [Higgins's awful story]” (546). と言う）、および、②事件の様子を語りながら、“Oh, God! Mr. Davis, I once dreamt, when I was a little, innocent boy, that I should commit a crime like this, and I wakened up crying; and my mother comforted me—that is the very reason I tremble so now” (546). と、Higginsが動揺すること（この科白は、殺人犯と自分が同一人であることを、無意識裡に吐露したものである）、この二点によって、彼が老婆殺人の犯人である可能性を作者は読者に提示している。

後者に関しては、①Higginsには、「貪欲で偽善的な老婆に天誅を下す」という切実な動機があったこと（545-46）（Bonaparteは、『罪と罰』（1866）の主人公ラスコーリニコフの心理を援用しながら、「Higginsが老婆宅に押し入ったのは義憤からである」と説明している（51-52））、②話の相手が牧師である上、Higginsは自分の行為を悔いているから（“I should not wonder, Mr. Davis—I should not wonder if he repented after all, and did bitter penance for his crime; and if so—will there be mercy for him at the last day?” (546)）、老婆殺人事件をMr. Davisに語ることは、Higginsが牧師に罪を懺悔しているのと同じであること（Bacigalupo (168) とDuthie (145) は、「彼がMr. Davisに殺人事件を語るのは、良心の痛みがあったからである」と言っている（もつとも、「ここでHigginsが良心の痛みを感じるのは不自然」と反論する批評もある（Easson 216）））、更に、③Higginsの善性を吐露した“I always give to the poor, for once I read in the Bible that ‘Charity coverth a multitude of sins’” (545). という科白（そう言えばHigginsは、Barfordの子供たちにお金をばらいたし（533-34）、教会の貧しい人々のために多額の寄付をした（540））——以上三点に、Higginsの人間性を浮き彫りにしようとする作者の意図が見られる（この場面の「Higgins像描写の巧みさ」を指摘して、ChadwickがMrs. Gaskellを誉めている（39））。

つまり、この場面に描かれた良心の呵責混じりのHigginsの克明な心理は、

犯人が彼であることを示唆すると同時に、彼の人間性を明らかにすることによって、単なる恐怖物語以上の膨らみを作品に持たせているのである。

8. 第八場面 (547頁第2段落～第10段落; 約1.0頁)

翌日、Mr. Davisは、Higginsから聞いた話を、Miss Prattに伝える。

一頁足らずの短い場面ではあるが、作者はここでもsuspenseの構築に余念がない。まず、①Miss Prattの境遇を殺された老婆のそれと似せることによって、故意に読者の意識を攪乱しようとする。実際、この設定はこれまでの展開にもこれからの展開にも絡んでおらず、まさにその目的のためだけの設定である、と言える。次に、②Mr. Davisの話を聞いたMiss Prattが出す“grunt”（豚の鳴き声のような音）は、彼女の“suspicions of Mr. Higgins”を込めたものである、と記していること（547）。第五場面で“the thorn in the popular Mr. Higgins's side”（540）と記された彼女の仕草だけに、この記述によってHigginsの話の信憑性に疑義がはさまれていることになる。同時に、彼の正体に関するsuspicionsを暴く次場面での彼女の役割を、自ら匂わせたものになっている。

9. 第九場面 (547頁第11段落～549頁第2段落; 約1.0頁)

場面は、Miss Prattの従兄弟Godfrey Merton宅に移る。現場に残された手紙の切れ端の文字を頼りに、彼女が真犯人を突き止める。Nathaniel Hearnが犯人であるかのような一節を一旦設けた（548）のは、最後の最後までsuspenseを保持しようとする作者の工夫である。

この場面には、「犯行に及ぶ直前にHigginsがginger-wineを飲み、飲み口の栓にわざわざ証拠となるような手紙の切れ端を巻き付ける」という筋の運びについて、不自然さを指摘する批評がある（Sharps 189）。一方、これは彼の豪気を示す行動である、とする見解もある（Bacigalupo 169）。

10. 第十場面 (549頁第3段落～550頁第2段落; 約1.0頁)

第一段落で、Higginsがhighwaymanであって、老婆殺人の犯人であること

が明らかにされる。これで「suspenseの構築」を目的とする主筋は終わる（“The narrator’s approach throughout the story is to arouse the reader’s suspicion against Higgins by providing circumstantial clues to his true identity and by interspersing ironic hints regarding his nefarious occupation.” とするBacigalupoの指摘は的を得ている(167)）。

第二・第三段落で、Higginsが処刑される前後のCatherineとSquire Hearnの様子を描いたのは、「Squire Hearnの苦悩」を中心とする「人間ドラマ」の描写（副筋）をも終える必要があったからである。

以上、suspenseが構築される様を検証しながら、筋の展開に応じて場面を特定してきた。これによって明らかになったことを整理すると次の三点になる。

作者は、「Higginsの正体」に関するsuspenseの維持を図るために、筋の構成上、二つの工夫を施している。即ち、

- (1) 場面を頻繁に切り替えること、
- (2) 「起承転結」構造を導入すること。

作者は約18頁の短編の中に、十の場面を設定している。つまり、一場面当たり約1.8頁の割合で場面を切り替えているのである（表2・表3参照）。こうして筋の展開を迅速にすることにより、読者を退屈させないようにし、それらをsuspenseの維持に寄与させている。また、作者は、第一場面を「起」、第二～第六場面を「承」、第七～第九場面を「転」、そして第十場面を「結」と想定できるように作品を構成している。「起承転結」構造は叙述の基本である以上、筋の展開に関する読者の期待感が操作し易くなり、従って、suspense構築には好都合な方法なのである。

更に、場面を特定していくうちに分かった構造上の三つ目の特徴として、

- (3) 「Squire Hearnの苦悩」を中心とする副筋を挿入していることを指摘しておかなければならない。この工夫が物語に膨らみを持たせていることについては、「Ⅳ. 主筋と副筋」で詳述する。

Ⅲ. 登場人物の分析

作者は、登場人物を創造するに当たり、suspense構築にどのように資させているだろうか。

この問題を検討するために、主な登場人物が作品中何度言及されるかを場面別に累計してみた。その結果が、「表2: "The Squire's Story" における主な登場人物の場面別言及回数」である。言及度合いを更に正確に把握するために、「表2」の結果を各場面の頁数で割り、場面ごとの言及頻度を求めたものが「表3: "The Squire's Story" における主な登場人物の場面別頁当たり言及頻度」である。そして、その結果を視覚化したものが「図2: "The Squire's Story" における主要人物の場面別頁当たり言及頻度グラフ」である。

これらの図表を一覧して、主人公Higgins以外の登場人物は、次の三種類に分類することが可能であることがお分かりいただけるであろう。即ち、

- (a) 一度登場した限りで消えて行き、しかも言及回数が少ない人物 (Mr. Clavering, Mr. Jones, Sir Harry Manley, Isaac Wormeley, Godfrey Merton)、
- (b) 一度登場した後再登場し、しかも言及回数が多い人物 (Squire Hearn, Catherine, M. Davis, Jessy Pratt)、
- (c) 上記のいずれにも属さない人物 (Nathaniel, John Dudgeon)。

以下、それぞれのグループごとに登場人物の存在意義について考察し、作者の作為を探ることにする。

まず、(a) グループについて。このグループの人物は、①自分の役割を演じるためだけに物語に登場し、その役割を終えると舞台から消えて行くこと、② Godfrey Mertonを除く全ての人物が、物語の第四場面まででその役割を全うすること、という二つの特徴がある。

“White House” の貸主Mr. Claveringは、Higginsという借り手が見つかりと物語から消えるから、Higginsを物語に導入する役割を与えられている。賃貸契約を委託された弁護士事務所の事務員Mr. Jonesは、「Higginsの正体」に関する読者の疑惑を代弁する（あるいは、「煽る」）。それは、"[S]till the uneasy wonder as to who this Mr. Robinson Higgins could be, filled the clerk's mind long after Mr. Higgins . . . had taken possession of the White House"

表2：“The Squire’s Story”における主な登場人物の場面別冒及回数

場 面	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	合計 (回)
「起承転結」構造	起	承					転			結	
各場面の頁概数	2.5	2.0	1.5	1.5	1.0	3.0	3.5	1.0	1.0	1.0	18.0
Robinson Higgins	37	26	15	28	27	30	73	8	5	13	262
Mr. Clavering	8	3	0	0	0	0	0	0	0	0	11
Mr. Jones	16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	16
Sir Harry Manley	0	25	6	3	0	0	0	0	0	0	44
Isaac Wormeley	0	9	0	0	0	0	0	0	0	0	9
Squire Hearn	0	0	23	23	0	0	0	0	1	16	63
Catherine	0	0	15	22	3	0	0	0	1	18	59
Nathaniel	0	0	2	21	0	0	0	0	3	4	30
Jessy Pratt	0	0	0	0	18	0	0	17	18	0	53
Mr. Davis	0	0	0	0	2	0	57	9	3	0	71
John Dudgeon	0	0	0	0	0	65	0	0	0	0	65
Godfrey Merton	0	0	0	0	0	0	0	3	18	0	21

※ 本表は、Gaskell, Elizabeth. “The Squire’s Story.” *The Works of Mrs. Gaskell*. Vol. 2. 1906. New York: AMS Press, 1972. 532-50. における主な登場人物の場面別冒及回数を、固有名詞・代名詞などを基に、勘定したものである。

(534). という記述で第一場面が締めくくられていることから、察することが出来る。Barfordの狩猟仲間のリーダーSir Harry Manleyには、HigginsをBarford社会に招き入れ、Squire Hearnに彼の人格を信用させる役割が与えられている。狩猟のベテランIsaac Wormeley老人の役割は、Higginsの狩猟の上手さを保証することである。これによって、HigginsはSir Harryに注目され、Barford社会に受け入れられる切符を手になることになる。

これら四人の人物は、いずれも、これから物語がどう展開していくか分からない第四場面の段階で、登場し終えている。従って、読者は、これらの人物がこれからの筋にどうかかわってくるのか不明なまま、物語を読み進むことになる（読者は、作品を最後まで読んで初めて、上記四人が各々の使命を果たすためにだけ登場したことを知る）。これによって、読者の期待感は作者の操作に

表3：“The Squire’s Story”における主な登場人物の場面別頁当たり言及頻度

場 面	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	合計 (回)
「起承転結」構造	起	承					転			結	
各場面の頁概数	2.5	2.0	1.5	1.5	1.0	3.0	3.5	1.0	1.0	1.0	18.0
Robinson Higgins	14.8	13.0	10.0	16.7	27.0	10.0	20.9	8.0	5.0	13.0	14.6
Mr. Clavering	3.2	1.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0.6
Mr. Jones	6.4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.9
Sir Harry Manley	0	12.5	10.7	2.0	0	0	0	0	0	0	2.4
Isaac Wormeley	0	4.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0.5
Squire Hearn	0	0	15.3	15.3	0	0	0	0	1.0	16.0	3.5
Catherine	0	0	10.0	14.7	3.0	0	0	0	1.0	18.0	3.3
Nathaniel	0	0	1.3	14.0	0	0	0	0	3.0	4.0	1.7
Jessy Pratt	0	0	0	0	18.0	0	0	17.0	18.0	0	2.9
Mr. Davis	0	0	0	0	2.0	0	16.3	9.0	3.0	0	3.9
John Dudgeon	0	0	0	0	0	21.7	0	0	0	0	3.6
Godfrey Merton	0	0	0	0	0	0	0	3.0	18.0	0	1.2

※ 本表は、Gaskell, Elizabeth. “The Squire’s Story.” *The Works of Mrs. Gaskell*. Vol. 2. 1906. New York: AMS Press, 1972. 532-50. における主な登場人物の場面別言及回数、各場面の頁数で割り、場面ごとの一頁当たりの言及頻度を求めたものである。

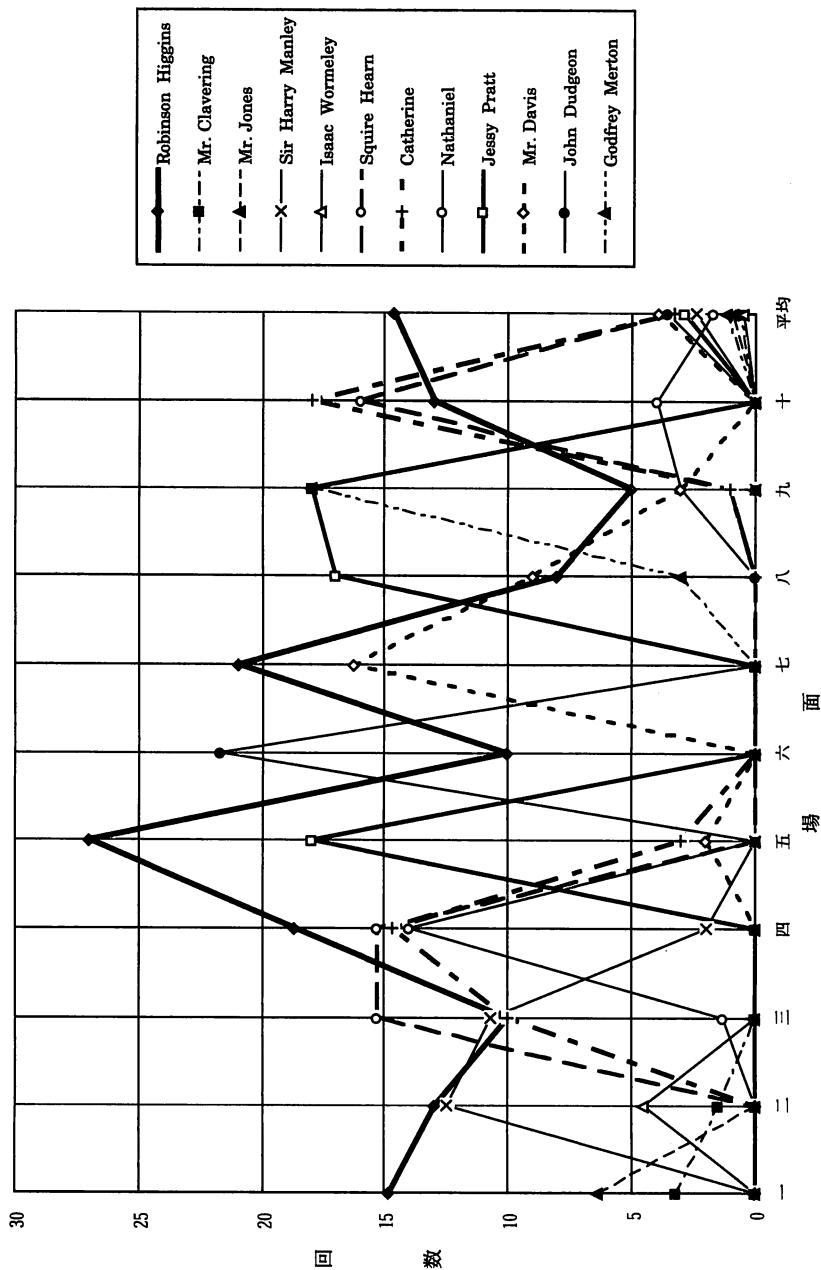
委ねられることになるから、suspense構築には大変好都合になる。

第八場面で初めて言及があり、主に第九場面で活躍する判事Godfrey Mertonは、Miss Prattに老婆殺人事件の犯人を発見させる手がかりを与える人物である。この人物は、ことの顛末がほぼ分かった段階で登場するから、suspense構築に資しているとは言えず、作者が上記の目的のためにだけ登場させた人物と考えざるを得ない。

(b) グループの人物は、(a) グループの人物と違って、物語の前半で登場した後、後半にも再登場することから、作品構成上、筋の展開により密接にかかわっていることが想像できる。

Squire Hearnは、素性のよく分からない男との結婚を娘に許した父親の苦悩を体現している。第三場面に描かれた、恋する娘を心配する父親像。第四場

図2：“The Squire’s Story”における主要人物の場面別頁当たり言及頻度グラフ



面に描写されている、娘の駆け落ちを知った父親の驚きと狼狽。そして、第十場面の、娘を不幸に陥れた自分の不覚を責める姿。これらは、「Higginsの正体を暴いていく」という主筋の背後にあって、登場人物の人間ドラマを活性化し、物語の内容を豊かにするものである。

彼の娘Catherineの、恋愛（第三場面）、駆け落ちと幸福な結婚生活（第四場面）、処刑される夫への献身（第十場面）、などの描写も、Squire Hearnの場合と同様、恐怖物語の背後にある人間模様を浮き立たせ、作品に潤いを与えるものである（もともと、Duthieは、“[E]ven the trusting wife and the old father-in-law are too lightly sketched to inspire much sympathy” (146). とし、二人の描き方に不満を呈しているけれども）。

Miss Prattは、“But there is some one to make ill-natured remarks, and draw ill-natured conclusions from very simple premises, in every place; and in Barford this bird of ill-omen was a Miss Pratt” (539). という紹介のされ方や、“the thorn in the popular Mr. Higgins’s side” (540) という位置づけから、Higginsの生き方の妨げになる人物であることを予感させる。しかも、彼女は“a Dissenter” (540) という設定であるため、キリスト教徒としての役割を担っていることも予感させる（たとえば、「悪を憎む」「愛を説く」「信仰の模範となる」など）。そして、その予測に違わず、Higginsが殺人犯であることを突き止めることで、「悪を憎む人」としての役割を果たすのである。彼女が本能的に抱くHigginsへの嫌悪感（539-40; 547; “[H]e has never been a favourite of mine” (548).）は、「Higginsの人格を信頼することへの警鐘」として、作者が読者に用意した工夫なのである。

“Dissenting Minister”としてのMr. Davisの一番の役割は、老婆殺人事件を語るHigginsの聞き手になることである。ここで彼は、奇しくも「罪人の懺悔を聴く神父」と同じ立場に立たされている。二人をこのような関係に設定した作者の意図は、殺人の動機や、罪を悔いている様子、そしてHigginsの善性などを明らかにして、Higginsの人間像を浮き彫りにすることにある。Mr. Davisの二番目の役割は、Higginsから聞いた話をMiss Prattに伝えることによって、「殺人犯の特定」（つまり「Higginsの正体の追求」）という主筋の進展を助

けることである。

以上の考察から分かるように、(b) グループの四人には、「Higginsの正体を明らかにしていく主筋」を補うべく用意された「Higginsを取り巻く人々の人間模様を描く副筋」を構成する役割が与えられている、と言ってよい。

最後に (c) グループについて。

Squire Hearnの長男Nathanielは、前半に登場した後、後半にも名前が出てくるが、比較的言及頻度が少なく、Barfordの弁護士John Dudgeonは、第六場面きりの登場であるが、比較的言及頻度が多い。それは、各々次のような理由によると考えられる。

Nathanielは、第四場面で、①Sir HarryのHiggins評に痛烈な皮肉を浴びせることで（“Confound Sir Harry! So that a man sits his horse well, Sir Harry cares nothing about anything else” (538).）、Higginsの人となりに関する謎を深め、②妹夫婦との絶交宣言により父親を苦しめ、悪役になることで、Squire Hearnをめぐる人間模様の描写に寄与する。更に、③第九場面では、殺人犯である可能性が一時的に示唆され、suspenseの行方を追っている読者を攪乱する道具となり、④第十場面では、父親を冷遇する悪役に徹することで、Squire Hearnの哀れさを誘う。このように、Nathanielは「suspenseの構築」(①③)と「人間ドラマの描写」(②④)の両面に渡って作品構造にかかわっている訳だが、「人間ドラマ」の主演は、やはりSquire Hearnであり、それには悪役として絡んでいるだけだから、結果的に言及頻度が少なくなっている。

John Dudgeonは、①地主たちの経済状態を把握する立場にありながら、彼らに頭の上からない“attorney”の複雑な立場を描き込むことによって、Barfordの住民生活の一部を紹介すること、②彼の金庫が盗まれるという事件を織り込むことで、Higginsが犯人である可能性を示唆し、ひいてはsuspense構築に資させること、の二つの役割を背負っている。そのために言及頻度が多くなったわけだが、第七場面に入ると一気にHigginsの正体が明らかにされるから（「転」部に入ってから、約一週間でそれが分かる）、作者は彼を第七場面以降もsuspense構築に使う必要がなくなったのである。

以上の考察によって、作者が、①「suspense構築」のために、主な登場人物一人一人にあらかじめ意図的に役割を与えていることと、②各々をその役割に応じて、「suspense構築」だけではなく「人間ドラマの描写」にも寄与させんとしていることが、お分かりいただけたことと思う。

IV. 主筋と副筋

これまでも折に触れて述べてきたが、この作品には「副筋」が存在する。本章では、作品中最も言及が多く、物語の背景となっていると言っても過言ではない「狩猟の描写」と、二番目に言及が多い「Squire Hearnの不幸をめぐる描写」に込められた作者の意図を探ることで、「主筋」と「副筋」の存在を確認したいと思う。

まず、「狩猟の描写」の具体例を検証してみよう。

第一場面には、①“White House”の魅力は“capital stables”が付属していることである(532)とか、②“[The house] was in a hunting county”(532). というように、「狩り」または「狩り用の馬」に関する描写がある。第二場面第一段落には、屋敷の借り手が見つかったことを喜んだMr. Claveringが、stablesを見事に改修した結果、“Since the days of the Roman emperor, never was there such provision made for the care, the comfort, and the health of horses”(534). となったという記述があり、以降、この場面は狩猟の描写一色である。第三場面には、“White House”に転居してきてから一年で、Higginsは“the most popular member of the Barford hunt”(536)になり、結婚相手の父親Squire Hearnは、“an old hunting squire”(537)と紹介される。第四場面には、Barford huntsmenのリーダーであるSir Harryを非難するNathanielの科白があり(538)、第五場面には、“[Miss Pratt] did not hunt—so Mr. Higgins’s admirable riding did not call out her admiration”(539). という一文がある。第六場面は、迷い込んだ狐を追ってBarford huntsmenがJohn Dudgeon邸を訪ねた時の話である。Higginsが老婆殺人事件をMr. Davis

に語る第七場面と、Mr. DavisがMiss Prattにその話を伝える第八場面には、狩猟への言及はなく、第九場面に、「Higginsが犯人とはとても考えられない。狩猟仲間の一人だし、あの優しいSquire Hearnの娘婿じゃないか」("It is too horrible to think of; a member of the hunt—kind old Squire Hearn's son-in-law!" (548-49)) というGodfrey Mertonの科白がある。第十場面にも、狩猟に関する言及はない。

こうして「狩猟への言及」に着目して作品を振り返ってみると、作者は、前半一杯（第一～第六場面）、物語の背景に「狩猟」を使い、後半（第七～第十場面）では、第九場面のGodfrey Mertonの科白の中でのみ「狩猟」に言及したことになる。こうするとGodfrey Mertonの科白が際立つことになるが、そうすることによって得られる効果は、彼の期待に反してHigginsが真犯人だった場合に生じる皮肉の強烈さ、である。

「Ⅰ. 序」で指摘したように、この作品の目的は「読者の恐怖心を煽ること」であるから、主筋は「Higginsの正体を暴くこと（つまり、suspenseの構築）」を軸に展開している、と了解してさしつかえない。この前提に基づいて「狩猟への言及」が多いことの意味を探れば、物語の前半部で狩猟の達人としてのHigginsを読者に印象づけることによって、後半部のどんでん返しが一層効果的になるよう工夫している、ということになる。作者は、「狩猟の描写」をも「suspense構築」に利用している訳である。

「狩猟」の次に言及が多いのは、「Squire Hearnの不幸」に関する描写である。

Squire Hearnには、第三場面での初登場以来、「苦悩する父親」の役割が与えられている。第三場面では、娘CatherineとHigginsとの仲を心配し、第四場面では、「妹がどういう人間か分からない男と交際することを認めた」と、Nathanielに思慮不足を非難される。最後の第十場面では、息子に見捨てられた上、「娘が不幸に陥ったのは、出自不明の男との結婚を許した自分の責任である」という自虐心にさいなまれ、Higginsが処刑された後、娘と共に異国の地で人目を忍んで暮らす。

このようにSquire Hearnを中心に作品を読んでもと、「II. 場面設定の
 説明」や、「III. 登場人物の役割」の (b) グループを論じた部分などで折に
 触れて指摘したように、作者は、物語を単なる「恐怖物語」で終わらせないた
 めに、Higginsの正体を暴く「主筋」に絡めて、Squire Hearnをはじめとする
 Higginsを取り巻く人間たちの「人生ドラマ」を描き込もうとしていることが
 分かる。

「第六場面《Dudgeon Episode》の中で、attorneyの微妙な立場を描いたこ
 と」（この場面の“the realistic representation of the Barford attorney, par-
 ticularly in relation to his employers, the country gentry”を、Sharpsが嘗
 めている（187））や「第七場面で、老婆殺人事件を語るHigginsの人間像を浮
 き彫りにしたこと」なども、恐怖物語の背後にある「人間模様」を浮きだたせ
 ようとする作為の現れである。この作品を「人間性をも盛り込んだ秀作」（北
 川 iv）とする批評は、Higginsの人生の背後に「人間ドラマ」が描かれている
 ことを看破したものである。

V. 結

本稿の要旨を整理すると、次のようになる。

まず、「I. 序」で、「読者の恐怖心を煽るために作者が施した工夫」を解
 明することが、本稿の目的である、と述べた。

次に、「II. 場面設定の説明」で、Higginsの正体を明らかにするまでの
 suspenseを構築するために、作者は、①場面を頻繁に切り替え、②「起承転結」
 構造を採用する、という二つの工夫を施していることを指摘した。合わせて、
 (i) 場面を特定する過程で判明したこととして、「副筋の存在」を示唆した。

「III. 登場人物の分析」では、主人公以外の登場人物を (a) (b) (c) の三
 グループに分類し、その存在意義について考察した。その結果、作者は、③そ
 の場限りの役割しか持たない人物を前半に多く登場させることによって、「こ
 れらの人物がどう筋の展開に絡んでくるのか」という読者の予測を操作しよう
 としていること、また、④Higginsが犯人であることを読者に示唆する人物を
 用意していること、が分かった。同時に、(ii) 登場人物によっては、殺人事件

の背後にある「人間ドラマ」を偲ばせる役割をも負わされていること、も指摘した。

そして、「Ⅳ. 主筋と副筋」では、物語中多く言及される「狩猟」と「Squire Hearnの不幸」の意味について考え、作者は、suspense構築を主眼とする「主筋」と、人間ドラマを描くことを主眼とする「副筋」に寄与させるために、それぞれの記述を用意したと結論づけた (⑤ (iii))。こうして「副筋の存在」を確認した上、「副筋」によって、「主筋」が追求する「suspense構築」だけでは描くことのできない「人間ドラマ」が描き込まれ、作品に膨らみが生じていると述べた。

以上の考察から、作者は読者の恐怖心を煽る（即ち、suspenseを構築する）ために、少なくとも五つの工夫 (①②③④⑤) を施していることがお分かりいただけるであろう。そして、作品を唯の「恐怖物語」として終わらせないための配慮として、場面設定の面でも (i)、登場人物の創造の面でも (ii)、背景描写の面 (iii) でも、「副筋」を織り込む工夫をしていることも、お分かりいただけたことであろう。

この作品には、「主人公Higginsが生きていない」(Duthie 195; Sharps 188)、「hasty compositionによるsmall mistakes and discrepanciesの存在」(Bacigalupo 167; Sharps 188; Rubenius 137) などの批判があるのは事実である。また、「作者の故郷Knutsfordで実際に起こった話に基づいて書いたもの」(Chadwick 35-36, 38-39; Ganz 207; Rubenius 280; Ward xxxii; Whitfield 61) だから、特に筋を練る必要がなかった(Sharps 187-88; "Mrs. Gaskell seems to have thrown together the legendary material without attempting to organize and order it" (Sharps 188).) として、「手抜き作品」とする酷評もある(Wright 80)。勿論、「Higginsの人間像描写の確かさ」(Chadwick 39)、「narrationの巧みさ」(Duthie, "Notes on Some Gaskell Stories" 16-17; Ward xxxiii)、「Barford社会が活写されていること」(Bacigalupo 167)、「実在の人物Edward Higginsとは違う主人公Robinson Higginsを作り上げた作者の手腕の見事さ」(Sanders 60)、などを認める肯定的評価(Payne 27)もある。

いずれにせよ、本稿で試みた作品構造の分析によって、構造上の裏付けのない印象批評を下す弊を免れ、作者の作為を明らかにできたことだけは確かであろう。

余談ながら、“White House”のモデルになった屋敷の隣家に、Mrs. Gaskellは結婚前住んでいたことがあり (Sharps 187)、the highwayman Edward Higginsの紹介記事を書いたHenry Greenというthe Unitarian Minister of Knutsfordの娘たちがこの屋敷を借りて寄宿学校を開いた際に、作者は娘の FlorenceとJuliaを通わせた、とのことである (Chadwick 40)。

Note

¹ Elizabeth Gaskell, "The Squire's Story." *The Works of Mrs. Gaskell*, ed. A. W. Ward, vol. 2 (1906; New York: AMS Press, 1972) 532. これ以降、作品からの引用は全てこの版により、引証頁数は丸括弧に含め、本文中に挿入する。

Works Consulted

- Bacigalupo, Marie D. *The Short Fiction of Elizabeth Gaskell*. Diss. Fordham University, 1984. Ann Arbor: UMI, 1985. 8506315.
- Bonaparte, Felicia. *The Gypsy-Bachelor of Manchester: The Life of Mrs. Gaskell's Demon*. Charlottesville: UP of Virginia, 1992.
- Chadwick, E. H. *Mrs. Gaskell: Haunts, Homes, and Stories*. London: Sir Isaac Pitman & Sons, 1913.
- Duthie, Enid L. *The Themes of Elizabeth Gaskell*. London: Macmillan, 1980.
- . "Notes on Some Gaskell Stories." *The Gaskell Society Newsletter* 11 Mar. 1991: 15-18.
- Easson, Angus. *Elizabeth Gaskell*. London: Routledge & Kegan Paul, 1979.
- Ffrench, Yvonne. *Mrs. Gaskell*. London: Home & Van Thal, 1949.
- Ganz, Margaret. *Elizabeth Gaskell: The Artist in Conflict*. New York: Twayne, 1969.
- Gaskell, Elizabeth. "The Squire's Story." *The Works of Mrs. Gaskell*. Ed. A. W. Ward. Vol. 2. 1906. New York: AMS Press, 1972. 532-50.
- Payne, George A. *Mrs. Gaskell and Knutsford*. Manchester: Clarkson & Criffiths, 1900.
- Pollard, Arthur. *Mrs. Gaskell: Novelist and Biographer*. Cambridge, MA: Harvard UP, 1965.
- Rubenius, Aina. *The Woman Question in Mrs. Gaskell's Life and Works*. Uppsala: Almqvist & Wiksells Boktryckeri AB, 1950.
- Sanders, G. D. *Elizabeth Gaskell*. 1929. New York: Russell & Russell, 1971.
- Sharps, John Geoffrey. *Mrs. Gaskell's Observation and Invention: A Study of Her*

- Non-Biographic Works*. Frontwell, Sussex: Linden Press, 1970.
- Stoneman, Patsy. *Elizabeth Gaskell*. Brighton: The Harvester Press, 1987.
- Storey, Graham, Kathleen Tillotson, and Angus Easson, eds. *The Letters of Charles Dickens: 1853-1855*. Vol. 7. Oxford: Clarendon Press, 1993.
- Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. London: Faber and Faber, 1993.
- Ward, A. W. Introduction. *The Works of Mrs. Gaskell*. Vol. 2. 1906. New York: AMS Press, 1972. ix-xxxii.
- Whitfield, A. Stanton. *Mrs. Gaskell: Her Life and Work*. London: George Routledge & Sons, 1929.
- Wright, Edgar. *Mrs. Gaskell: The Basis for Reassessment*. London: Oxford UP, 1965.
- 小倉多加志訳注 『対訳ギaskell：幸福な結末／異父兄弟／地主の物語』 東京：南雲堂, 1982.
- 北川悌二編注 「はしがき」 *The Old Nurse's Story and The Squire's Story*. By Elizabeth Gaskell. 東京：北星堂, 1983. iii-iv.
- 山脇百合子 「エリザベス・ギaskell研究」 東京：北星堂, 1976.